

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

# COCONUTS CLUB

October  
2019

10

常滑井戸筒談義







## いとけ 常滑井戸筒談義

常滑焼まつりの前後にこれまでたびたび  
お届けしてきた「秋の常滑焼特集」シリーズ、  
今年の第一弾は井戸筒をクローズアップ。  
大物を得意とする常滑でかつて盛んに生産された  
“重量級エース”の面白さを探ってみる。

屏写真:登窯に使われている井戸筒  
表紙写真:久田窯の井戸筒



ように感じられるから不思議である。事実これらも、常滑の地で長年にわたって培われた伝統の技を駆使して熟練の職人が削り上げた「作品」と言えるだろう。3点はケースの外に置かれ、じかに触れて手ざわりを楽しんだり、中に入って（！）サイズ感を確かめたりもできる。

常滑で井戸筒の生産が始まったのは江戸時代と考えられている。その頃の詳細はまだ明らかでないが、学芸員の小栗康寛さんによると、東海地方各所の遺跡から常滑産の井戸筒が出土しているほか、廻船問屋瀧田家には伊勢湾岸や江戸方面にも運ばれていたことを示す文書も残っているそうで、かなり広範囲に分布していたようだ。

明治時代に入ると木型を用いて大量生産が行われるようになり、常滑焼の主力製品のひとつとして発展する。展示室には草創期の江戸後期から最盛期の昭和初期までの井戸筒が並び、細部まで見ると意外に風合いや装飾が異なり面白い。ちなみに、昭和15年（1940）の製品価格表によると、井戸筒半鍔化粧井戸・並井戸の三タイプがあり、口径も一尺五寸（約45cm）から三尺（約90cm）まで六つもあった。

戦後もしばらくの間は盛んに生産されていたが、やがて上水道が普及すると、新たな井戸が掘られたり既存の井

戸が修繕されることもなくなり、需要は急速に減少する。知多半島では、昭和36年（1961）に愛知用水が通水された頃から上水道の整備が急速に進み、この時期に常滑焼の井戸筒も終焉を迎えたのだ。

**井戸筒だってオシャレしたい**

井戸はどこかノスタルジックな存在だが、寸胴で、太めで、赤茶色の工業製品である井戸筒だけを目にしても、飾り気もなく味も素気もないように思える。しかし、じっくり見てみると装飾が施されている井戸筒が多く、意外に洒落ているのだ。

一般的なのは、上部の周囲にめぐらされた紋様で、少し太くなった口の部分（どちらか）に施されている。口の部分に多いのは雷紋（渦巻き紋）や菱形紋。いっぱい下部分には、花菱紋、雲龍紋、植物紋などが見られる。ことさらアート性を主張しているわけではなく、あくまでワンポイント的な飾りにすぎないのだが、どれも見るほどに不思議なデザインで、なんとも言えず味深い。

今回の展示で最も古い江戸後期の井戸筒は、口の部分が甕のように少しすぼまった形が特徴。その口の下には鳥の足跡のようなものが付いており、展示の

解説には「籠状装飾」とされている。籠とは、桶や樽を締め固めるために巻く、竹で編んだ輪のこと。「籠で桶や樽を補強するように、井戸筒も強度が保たれることを願ったのではないだろうか」と小栗さんは話す。これを後世の職人が進化させたとも考えられる。

井戸筒に装飾を施すには三つの技法があり、その三つとも企画展で紹介されているのでご覧いただきたい。一つ目は、石膏型を用いて紋様が付いたプレートを何枚も作り、井戸筒の表面に貼り付けてゆく方法。二つ目は、井戸筒の木型にあらかじめ紋様を彫り込んでおき、そこに陶土を仕込めば自動的に紋様が表面に付くという方法。三つ目は、リングズという道具を使って表面に跡をつけてゆくという方法だ。

リングズを漢字で書くと「輪図」になるだろうか。これは、取っ手をつけた陶製の回転型スタンプで、焼成前の陶土の表面でコロコロ転がせば、連続した紋様を付けることができる。会場ではリングズで油粘土に紋様を付ける体験コーナーもあり、大人でもやってみると結構楽しい。このような道具があれば、面倒そうな装飾も意外と楽に作れることがわかる。

**町を歩けば井戸筒に当たる**

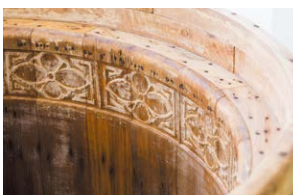
では、井戸筒を探して町へと出てみよ



紋様の石膏型



転がして紋様を付けるリングズ



紋様が付いている木型



雷紋（上）と花菱紋



籠状装飾



「用水」紋



桔梗・菱形紋

やきものの里・常滑は、井戸と井戸筒のまちである。



**いま明らかになる井戸筒の世界**

とこなめ陶の森資料館で「常滑の井戸筒展」が開催中だ。多彩な作品や製品を所蔵するとこなめ陶の森だが、井戸筒に特化した展示は開館以来初めてとか。ぜひとも見ておきたい企画展である。

井戸筒といっても現在ではあまり聞き馴染みがない。これは、かつて常滑で大量生産されていた製品のひとつだ。簡単にいうと井戸用の土管で、井戸側や井筒とも呼ばれた。井戸は、地面から垂直に深く穴を掘り、地下水脈を汲み上げるための施設だが、掘ったままの状態では穴の側面が崩れてしまう。そこで、保全のために井戸筒を穴の中に積み上げるのだ。また、穴の入口をそのままにしておく中に落ちる危険があるので、地上にも井戸筒が設置された。

今回の企画展では、とこなめ陶の森が収蔵する8基の井戸筒をはじめ、成形に使った木型、焼成前にマンガン釉の粉を素地に振りかけるのに使った木製の筒、装飾道具などを展示している。芸術品でもない陶製の太い筒が、静謐なミュージアムの展示ケースにずらりと置かれている様はなかなかユニークだ。こうして展示されると、一見無粋な井戸筒も洗練された美を持ち得ている。

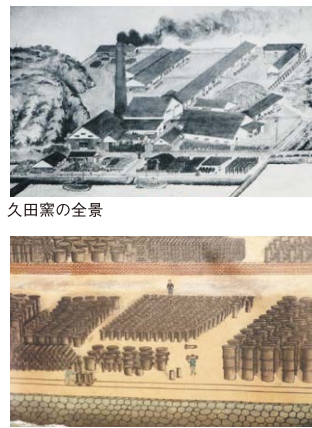


井戸筒を求めて常滑じゆうを巡っていたところ、今なお現役の昔ながらの手漕ぎポンプ式の井戸に遭遇したので、

現役の井戸が山方にあつた！



久田豊三郎と久田窯で作られた虎の陶彫



久田窯の全景 上の絵を拡大すると井戸筒が描かれている

を作ったのだろう。 こうした技術が認められたことも一因か、久田窯の業績は上々だったようだ。「この井戸筒を人目に付くよう家の前に置いたのは、おそらく社業の宣伝のためでしょう」と久田さんは話す。陶製レンガ造りの蔵も同様に、宣伝として大正6年(1917)に建てられたもの。久田窯は当時の常滑窯業界で確固たる存在感を示していた。

最後に紹介したい。 場所は常滑市街南部の山方町。県道34号半田常滑線の山方橋交差点から南へ250メートルほどの道端に「北井戸」があり、さらに数10メートル南にもうひとつ「南井戸」がある。どちらも小屋風の覆いで井戸が守られており、雨風や日差しも苦にすることなく水が汲めるようになっていく。抹茶色をしたポンプは艶々しく、また、井戸筒の上に置かれた厚みのある木の蓋には、近年取り付けたことを示す日付が記されている。重厚な井戸筒も本来の居場所

に収まっているかのようで、これぞまさに「生きている」井戸だ。 管理するのは向山井戸組合。加入者が井戸を使用できる「共同井戸」である。組合の代表者として世話をする肥田荘治さんによると、現在の加入者は41戸。組合費は年間360円で定期的に水質検査もしており、煮沸すれば飲用にもできるという。界隈の人口からすると加入者数が少ない気がするが、かつてはもっと多くの近隣住民が利用しており、昭和39年(1964)には148戸が加入していた。いま加入している人たちもさすがに頻繁には使用していないようだが、それでも野菜や飲み物を冷やしたり、水打ちや花への水やり用にと、汲みに来る人がときどきいる。



正住院の山門左側の天水桶



正住院の山門右側の天水桶



左の天水桶の紋様



組合で保管している戦前の資料。「注意」の内容が興味深い



向山井戸組合の北井戸

う。本誌エリアでは、井戸や井戸の跡はけつこう簡単に見つけられる。自宅にもある、もしくはあったという読者もおられるだろう。やきもの散歩道の周辺はもちろん、寺にも多い。知多四国を巡拝している人はお参りのついでに探してみたいかがだろう。 寺では、井戸とは異なる用途で使われている例も多く見られる。それは、雨水を溜める天水桶だ。これは本堂や山門の下に設置されている貯水施設で、屋根に落ちた雨水が雨樋を伝ってこの中に流れ落ち、それを溜めておいて防火用水にする。愛知県では石製が比較的多いが、常滑焼の龍巻の甕や井戸筒もあるのだ。製品名は井戸筒だが、井戸専用で特化しているわけではなく、天水桶として利用するものもありだ。

常滑市街だと、南部の保正にある浄土宗の古刹、正住院で井戸筒の天水桶を見ることが出来る。嘉永6年(1853)築の立派な山門の下にあるのがそれだ。左右異なっており、左側はごく標準的な井戸筒(境内にはほぼ同じサイズ・デザインの井戸がある)であるのに対し、右側は正面に「用水」の文字が入った「変わり種」。つまり、最初から天水桶用として作られたもの。口部分の装飾は菱形紋だが、溝の陰影で市松模様にも見えるのが面白い。

さらに観察してみると、「AICHI

井戸筒の名品が阿野にあつた！ 陶の森の小栗さんによると、これらの装飾が施されたものとは一線を画す見事な井戸筒が、常滑市街から南へ2キロほどのところに位置する阿野町にあるというので、さっそく訪ねてみた。阿野町を含む旧知多郡西浦町は、常滑ほど多くの製陶工場が集まる地域ではなかったが、衛生陶器メーカーのジャニス工

業株式会社もあり、窯業の町の一翼を担ってきた地域だ。 名品があるのは、旧国道の県道252号を少し入ったところにある久田和彦さんのお宅。着いてみると、井戸筒よりも先に陶製レンガ造りの蔵と塀が目



「ヤマチョウ」の刻印

この井戸筒の来歴を久田さんに尋ねると、久田さんの曾祖父・久田豊三郎が経営していた久田窯で作られたものという。久田豊三郎は明治時代を中心に活躍した実業家で、明治36年(1903)、現在のジャニス工業の場所に久田窯を開き、主に両面焚倒焰式角窯を用いて土管を量産した。この井戸筒は、明治末期から大正時代にかけて開催された博覧会への出品用として作られたもので、装飾を手掛けたのは陶彫の名人として名高い富本梅月。当時の博覧会では産業製品の見本市・品評会のようなもので、評判になれば業績アップに繋がるので、名人を招いてこのような逸品

写真がそれだ。天女の羽衣のような波間を悠々と数匹の鯉が泳いでいる。ぎょろりとした眼、せりあがった大きな背鰭、体を覆う細かな鱗。その精緻さと迫力に思わず引き込まれる。 常滑市街に残る井戸の跡



キング砥石敷地内の井戸の跡



常滑市街に残る井戸の跡



井戸筒が井戸を守り、  
その井戸が暮らしを守ってきた。



北井戸から汲み上げた清らかな地下水

向山井戸組合の設立は、昭和2年（1927）。設立にあたっては山方・市場・保示地区の代表者13人による発起人協議会が開催されたという記録があり、そのなかに肥田さんの祖父、安之助もいた。組合発足後ただちに北井戸が作られ、夏の盛りを迎える前に使用が開始された。ちなみに井戸筒の製造元は、山方にあった<sup>マシヤ</sup>商店である。

ところが、数年後には井戸の水が減るようになり、水汲み時間を24時間か

ら5〜9時・16〜19時に制限し、飲料のみに限定する対策が講じられる。それでも水不足は解消されなかったのか、昭和14年（1939）には新たに南井戸も作られた。

昭和16年生まれの肥田さんも、子供の頃にはよく水を汲みに来たとか。「朝夕の飲料水を汲むのが我が家の子供の仕事だったんです。水がたっぷり入った木桶を二つ、水運搬用に改造した乳母車に乗せ、家までよく運んだも

のですよ」。力のある人は天秤棒<sup>てんびんぼう</sup>に桶をぶら下げて運んでいたとか。戦前戦後を通じて住民の生活用水として親しまれたが、昭和20年代後半から常滑の上水道が整備されると利用者も年々減り、組合の役員会も昭和44年（1969）を最後に開催されなくなった。それでも井戸が維持されているのは「水不足に悩まされてきた地域なので、井戸や水を大切にしている気持ち

が今も受け継がれているように思

## 常滑の井戸筒展

会場／とこなめ陶の森 資料館  
（常滑市瀬木町4-203）  
会期／～10/14（月祝）  
開館時間／9:00～17:00、月曜休  
（祝日の場合は翌日休）  
問い合わせ／0569-34-5290

※陶芸研究所では9/23（月祝）まで企画展「旅する、千年、六古窯一火と人、土と人、水と人が出会った風景」を開催しています。



ます」と肥田さんは話す。防災意識が高まっている近年は井戸の重要性が見直されており、向山井戸もこれから注目されるかもしれない。

許可をいただいて、井戸から水を出してみた。力を入れてポンプの取っ手をぐいと押し込むと、樋から清冽な水が勢いよく吐き出された。暑い盛りの取材、井戸水で顔を洗うと暑さが一気に吹き飛ぶ。井戸筒も水飛沫を浴びて眠りから覚めたかのようにだった。

〈取材協力〉久田和彦さん／肥田荘治さん／みんなの緑がわ／龍松山正住院／キング砥石株式会社／とこなめ陶の森  
〈参考文献〉常滑の陶業百年（とこなめ焼協同組合）／常滑焼と陶磁器と製品と製法の歴史-上巻 柿田富造著作集